

大通公園を望む窓辺から

聖地円山球場、夏

常任理事 みずたに 水谷 まさひろ 匡宏

札幌円山の麓にある同球場といえば高校野球の聖地として長きにわたり歴史を刻んだ馴染み深い球場である。しかし今シーズンからは高校野球連盟の突然の方針変更で、甲子園出場をかけた夏の北海道大会の準決勝と決勝の試合は新設のエスコンフィールドとなり、優勝校の雄姿は円山で見ることができないことになった。そんな寂しい気持ちもあり私は今大会での同球場最後となる、ベスト4をかけた試合を観戦しに出かけた。そんな試合の途中に、一塁側の座席からぼんやりとレフト側の外野フェンスを眺めていると急に40数年前の自分の姿を思い出した。当時高校3年生であった私は8月の炎天下に東日本医科学学生総合体育大会（東医体）の準硬式野球の試合をレフト側芝生席で観戦していた。その年は学園紛争の嵐が吹き荒れ、わが母校もご多分に漏れず早々と6月よりロックアウト状態に陥り、通常の授業は中断しそのまま夏休みに突入していた。その時点では自分の職業選択だけでなく、入学志望大学さえまだ未定の状態であった。ただ偶然にも同郷の3歳年上の先輩が北大医学部生で、同学部の野球部に所属していた。子供のころから一緒に軟式野球チームのメンバーであったこともあり、喜んで応援に駆け付けることにした。相手チームの優勢のまま終盤を迎えたが、味方チームにもやっと反撃のチャンスが訪れた。二死二塁で前述の先輩がランナーに出ており、その俊足を生かせればヒット一本で二塁から一挙にホームを狙えるチャンスであった。期待通りに次打席のバッターの打球は三遊間をゴロで破りレフト前に転がった。これで一点が入るかと思いきや、相手方レフト外野手は捕球するや否や、元大リーガー、イチロー選手のごときレーザービームに匹敵するみごとな送球でホーム寸前でタッチアウトにした。その後はチャンスらしい場面も訪れることなく、そのまま相手チームに押し切られゲームオーバーとなった。意気消沈する学生たちの姿を記憶に留めながら、一人球場を後にした。その数年後志望がかない同大学に入学した私は、迷わずに同野球部に入部し、2年生の夏、前年冬季の間の猛練習が実り、内野ショートのレギュラー選手として東京開催の東医体に出場した。順当に決勝まで勝ち上がった我がチームは、ついにあの因縁チームと優勝をかけた対戦した。結果は我がチームが完璧な試合運びで完封勝利し5年ぶりの優勝を成し遂げた。通算6年間の学生野球のなかで、実際円山球場での出場試合は数回経験しただけが、高校3年の夏の円山球場での出来事は私にとってはその後的人生の進路を心に決めた紛れもない場所であり聖地であった。

雲中供養菩薩と庭のチョウ

前理事 しまだ 島田 みちろう 道朗

私にとって学会に行くということは、錦の御旗のもと大手を振って旅行に行くということである。新型コロナ感染症の流行以前は、学会時期にはあちらこちらへ行ったものである。以前、京都の内科学会の時に、平等院鳳凰堂を訪れた。平等院見物は、1052年に藤原頼通が創建した鳳凰堂の建物と定朝作の阿弥陀如来像、そして雲中供養菩薩を見ればほぼコンプリートする。1052年という年は釈迦が入滅してからちょうど2000年にあたり、以後仏法は廃れるという末法思想が信じられていた。当時の貴族は来世での極楽往生を願い西方極楽浄土の教主である阿弥陀如来を本尊とする仏堂を盛んに建立した。

鳳凰堂の阿弥陀如来像の後方の壁には左右に26体ずつの雲中供養菩薩が掛けられている（これはレプリカで本物の国宝は鳳翔館に展示されている）。雲に乗った菩薩がそれぞれ楽器を奏でたり、舞いをまったりしながら極楽浄土から阿弥陀如来とともに迎えに来る情景を描いた『来迎図』の3D化とも言える。

昨年、父の17回忌を家族だけでとり行った。父が亡くなったのは7月の暑い日であった。病院に併設した自宅で息を引き取ったのだが、この時、ふと見た庭木の周りに白いチョウが10頭ぐらい群れていた。この景色が妙に気になっていた（あとから解ったのだが、エゾスジグロシロチョウであった）。

私は、決して信心深くはないが、平等院で雲中供養菩薩を見た時、奇しくも父が亡くなった日のチョウが群れる様子が脳裏に浮かんだ。父が極楽往生したかどうかはさておき、胸のつかえがおりた気がした。

かの時代の人がいまわの際に、あのようなチョウが群飛ぶ光景を目の当たりにしたら、きっと極楽往生できると確信したに違いない。

滅多にない自然現象と人生の大きな出来事が重なった時、人は偶然とするのではなく、科学では説明のできない何かを思うのかも知れない。繰り返すが私は決して信心深くはない。

